学生への対応

3月11日

・地震発生直後に、大学構内放送で構内にいる学生に避難を呼びかける。大学構内には、卒業研究やサークル活動をしていた学生等が残っていた。

〈大津波警報が防災無線より流れる。〉

・ワンセグ対応のテレビなどにより、仙台港付近に津波が押し寄せていることがわかる。本学まで津波が到達する危険もあると考え、大学構内にいた学生を校舎上層階に避難させることを検討する。

・事務職員は、対策本部（学長室）、学内誘導係（学生誘導）、トランシーバー中継係（本館事務室）にわかれ学生を誘導した。具体的には学生食堂前で集合した後、本館に集まり、さらに学生食堂内で一時待機したのち、5号館3階へ誘導した。しかし天井が崩れてくる恐れがあることから、再び本館2階へと移動した。

・津波の被害を受けなかったことから、対策本部は、学長室から非常用発電機の利用が可能な本館1階事務室に移動した。理工学部の学生は実験室から、サークルに所属している学生は部室等から食物・飲物・上着・毛布等を持ち込み、適宜、暖を取っていた。大学で備蓄していた非常食（缶入りパン）を学生に配布した。

・18時過ぎには、大きな揺れが収まってきたこともあり、各自が状況に応じて行動して良いこととなった。200人程度の学生は、避難してきた地域住民と共に一夜を過ごすこととなった。宿泊場所として、本館2階の会議室1、会議室2および2階フロアを中心に提供し、学生たちは椅子を並べたり段ボールを敷き詰めて眠れぬ夜を過ごした。

〈この時点で固定電話は不通になっていたため、それによる外部との連絡は絶たれていた。ただし、携帯キャリアによってはしばらく通話が可能だったので、教職員も可能な限り安否確認を行っていた。〉

・本館には大きな被害がなかったため、その晩は、避難している学生たちに対しては強い規制を掛けなかった。

・学生の避難が一段落したところで周辺の様子を確認しに行った。市街地の広範囲に渡って津波が

押し寄せているなど、被害の大きさが徐々に明らかになってきた。

・震災直後から自衛隊のヘリが救助活動を行っていたが、深夜になり、避難者を乗せた自衛隊の車両が来学し、彼らの受け入れを要請してきた。自治体からの正式な要請はまだなかったが可能な範囲で避難者の受け入れを開始した。

3月12日

〈午前5時頃から一部の学生達が大学の周辺を歩き回り始めたこともあり、東日本大震災による石巻地域の被害状況が学生間にも伝わっていった。〉

・教職員が大学構内の見回りを終え、本館以外の全ての施設を封鎖することとなった。本館1、2階のみが学生たちの避難所となった。

〈震災の影響により道路・路線が不通となり自宅、実家に帰省できない学生、あるいは保護者と連絡が取れない学生たちは不安な状況が続いていた。〉

〈学内に待機している学生達にも被害状況の情報が次第に入るようになったが、明るい話題が入ることはなく1日が過ぎて行った。そのような状況下、一部の学生は住居を確認しに戻り、食糧や日常品を大学に持ち帰ってきてくれた。彼らは食糧を持っていない学生に分け与えるなど、小さなコミュニティーが形成されてきた。〉

・各地から保護者が学生を迎えに来た。当初職員がその対応にあたっていたが、自主的に協力してくれる学生たちも増え、本館2階での学生の呼び出しは学生が自ら行うようになっていった。また、大学が一般の避難者の受け入れを開始したことで、多数の学外者が安否確認に訪れるようになった。そのため学生の保護者と学外者の入退管理を4年生や大学院生に依頼し、混乱を避けるようにした。

・名札の代わりに名前を書いたガムテープを上着に張って、名前で呼び合うようにした。

・食事の配給は、新たに避難してきた学生に対して行い、他の学生は必要に応じて職員から受け取る、あるいは自分たちで持ち寄った食糧を分け合うなどしたので、大きな混乱は生じなかった。

・自衛隊は生存者の救助活動を優先したため、食料や物資の配給は後回しになっていた。また自治体からの配給もなかった。そのため、避難している学生数と備蓄されていた食糧の残量の確認を行った。

・大勢の避難者と共存することから、学生には屋外での食べ歩き、消灯時間、トイレの利用方法について、注意を呼びかけた。

・学生の入退館が管理できない状態となっていたため、保護者との引き合わせに行き違いが生じないように、退出先・移動先を書き残していくよう取り決めた。

〈泥靴で汚れた本館を学生たちが進んで掃除していた。〉

・周囲の情報などを共有させるために、学生たちに伝言板を作成させ、情報の行き違いを防いだ。聞き逃し、言い忘れで危機的な状況に陥らないためにも、職員から受けた指示を伝言板に掲示させた。

3月13日

・水や食料の配給が十分に行き渡らないことから、市街地の一部で治安が悪化しているとの情報が流れ始めた。外出する学生には最大限の注意を払うよう促した。

・避難者を受け入れる際には、避難者の誘導や物資の搬入の補助を学生に依頼する。また、学生が個々の判断で、帰省する、一時的に帰宅する、大学にとどまる、あるいはボランティア活動などをすることができるように、強い規制は行わなかった。

・長期的な避難生活に対応して、学生たちに8組のコミュニティーを形成させ、それを4グループ編成にして無理のないローテーション（休憩・食事・掃除・休憩）で避難所の補助にあたってもらった。

・災害支援のボランティアが到着するまでの間、学生たちが避難所運営の支援にあたった。

・物資を積んだヘリコプターが多目的グランドに着いたとき、物資を雨天体育場に運搬する可能性があるので、学生たちに協力を依頼した。しかし待てど暮らせど自衛隊のヘリコプターはこなかった。

〈学生が帰省・帰宅する際には、食料や寝具などの物資を置いていき、不自由している学生が使える仕組みができた。持込みができなかった学生たちは、その食料などで空腹をしのぎ、布団で暖をとった。〉

・救援物資等で持ち込まれた食料は、消費期限などを確認し、衛生面にも配慮して保管・整理した。

・食料の管理は職員が行ったが、食事の配給は学生に協力してもらった。

・この頃になると原発事故の情報が学生に伝わり、一部でデマ等が流れ始めた。無用な不安に駆られる学生も出始めたため適宜情報を提供することにした。

・石巻地域は電話回線が断たれため、学生の安否確認に支障が出ていた。そのため仙台在住の教員が独自に集合し、ゼミなどを中心に学生の安否確認を始めた。

3月14日

・太陽が昇っている間は、ボランティア活動、避難所運営の補助、あるいは家族の安否確認などの活動を行い、夜は大学で寝る学生が約100人ぐらいになっていた。そのため、夜の食事の分量を確保できるよう配給された食糧の管理を行った。

・専修大学（東京・神田）のホームページで安否確認情報の公開を開始した。安否確認データについては、対策本部で把握しているものと、仙台在住の教員が収集したものを専修大学に送って整理した。

〈学生の安否確認の作業が進められていることもあり、大学に顔を出す学生も増えてきた。〉

・大学から仙台方面までを大学のマイクロバスで

運行した（1便）。コースは大学→鹿島台→　大郷町→　富谷町　→　泉中央　→　宮町（仙台市青葉区）→利府で学生の要望に応じて停車。

〈市街地の水がだいぶ引き始め活動範囲が広がり始めた。それとともに自治体が本格的に救援活動を開始したことから、ようやく救援物資が届くようになった。〉

〈物資は届くようなったが極度の燃料不足に陥り、自動車での移動が徐々に困難となっていった。〉

3月15日

・宿泊する学生数が100人以下となり、宿泊場所を会議室2、支援物資の備蓄場所を会議室1とすることにした。物品を公私混同しないように、声掛けを始めた。

3月16日

・学生たちが持ち寄った学内外の情報を基に壁新聞を作成し、本館2階の入口に掲示し、情報の共有を図った。学生たちが持ち寄った情報の例を以下に掲げる。

・石巻市災害ボランティアセンターが5号館に設置された。
・避難所の手伝いができる方は、物資持参の上、車で集まってください。受付9:00～16:00
・現在3℃、防寒対策としてガラス窓の下に段ボールを敷く、新聞紙をはおる。
・Date fmで地震メール情報が配信されている。
・携帯はソフトバンク・auの電波回復
・避難所でインフルエンザが流行。注意すること、手の消毒
・特設公衆電話が学内に設置される

●石巻専修大は当分の間休講、20日の学位記授与式は中止する。授業開始日や学位記伝達方法は大学ホームページに掲載する。新入生の入学手続きは4月15日まで延長。同4日の入学式は延期し、日時は後日連絡する。また、学生と教職員の安否確認連絡先は同大東京事務所03（3265）6218。被災地連絡業務を行うために仙台仮連絡所（電子メールisu@f-wish.com）を開設した。

【河北新報（平成23年3月17日）】掲載